

ニウエ島の村落生活

馬場優子

I はじめに

オセアニアのハワイ諸島、イースター島、ニュージーランドを結ぶ三角形に囲まれた地域をポリネシアと言う。その名の通り、この地域にはたくさんの島々が、あるものは群島を成し、あるものは孤島として大洋に浮かんでいるが、ニウエ島はそうした島々のひとつである。

考古学的調査によれば、この島には1000年以上も前から人が住んでいたことが判明している^①。初期の来住者は Samoa 諸島、Tonga 諸島、それに Cook 諸島から移住して来たとされているが、島の南部にはメラネシア人の影響もあるとの推測もある。

この島は1774年に James Cook に発見されて以来、その存在がヨーロッパ人の視界に入ってきた。その時 Cook 等は島民から激しい攻撃をもって迎えられ、内陸部まで入ることなく島を離れたのだが、その後彼らが訪れた Tonga 諸島の人々の歓迎ぶりと比較してあまりの違いにニウエ島を“Savage Island”，Tonga 諸島を“Friendly Islands”と命名したと言われている。

その後、幾度かヨーロッパ人が島に接近し、上陸を試みたが、島の周囲の断崖絶壁に阻まれ、また、島民の猛攻撃を前に目的を果たせず引き返している。

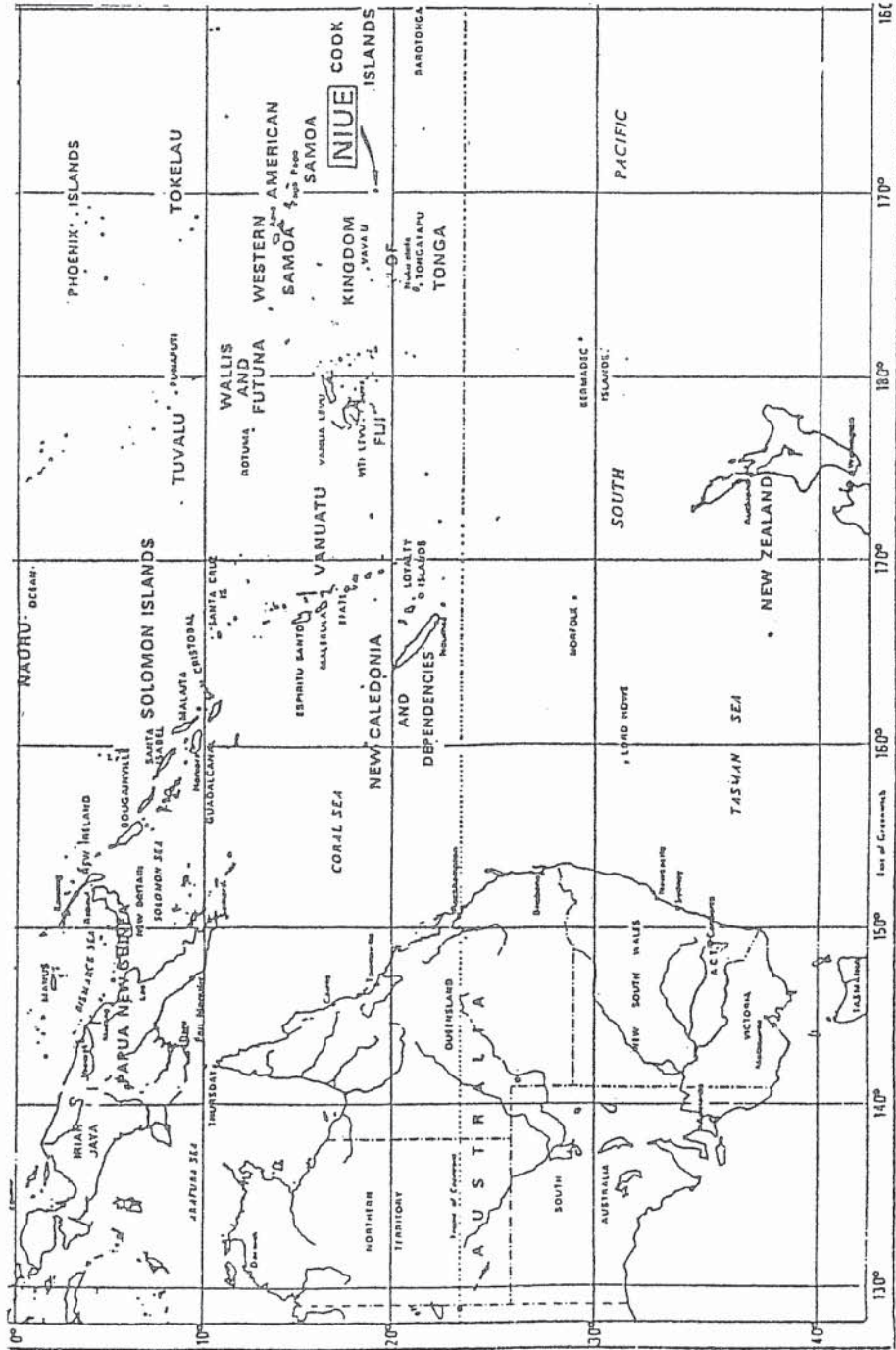
1830年にロンドン伝道協会の J. Williams が宣教のために来島したが上陸はせず、ニウエの若者二人をさらって行った。彼らを Samoa に連れて行ってキリスト教というものを体験させ、理解するようし向け、一年後にニウエに帰島させた。その後まもなく島でインフルエンザがはやったため、この二人の帰還者が持ち込んだものと見なされて、一人は父親ともども島民に殺され、他の一人は辛くも舟で逃げた捕鯨船に助けられたと伝えられている。

その後、ロンドン伝道協会はたびたび宣教師の上陸を試みたが成功しなかった。1840年代に彼らは再びニウエの若者を連れ去り、Samoa にて教化してニウエに送り込もうとしたが失敗した。1846年、Samoa に住むニウエ人が仲介者となって先のニウエ青年を説教師として受け容れるよう島民を説得し、ようやく成功した。1862年、ヨーロッパ人宣教師が初めてニウエに定住し、本格的に宣教活動を開始する。この後、ニウエ島は急速にキリスト教化されるが、同時に、宣教師の来住とともに流入してきたヨーロッパの文物が島民の生活に浸透し始め、島は貨幣経済に巻き込まれてゆく。

1900年、ニウエは自ら希望して英国の保護領となり、ついで1901年にニュージーランドの保護領に転換した。1974年、国連の勧告により、独自の憲法、政府、国会、首相を持つ「独立国」となったが、内政自治権はあるものの完全な独立国ではなく、ニュージーランドとの自由連合協定下に入り、経済上および外交・防衛上はニュージーランドへの依存関係にある。

上記のような歴史を持つニウエ島に関する社会・文化人類学的文献はほとんど皆無に等しい。本稿はニウエ島のフィールドワーク^②において得た情報および行政官、宣教師等の報告書、ニウエ教育省のまとめた資料、その他若干の既刊・未刊の資料に基づいて構成したニウエ社会の鳥瞰図である。

地图 1



Ⅱ 生態学的環境

1. 地理および植生

南緯19度、西経169度に位置するニウエ島は面積は約260平方キロで、ポリネシアの多くの島が諸島を成しているのに比して孤島である。周囲の島嶼と言えば北方約600キロにある西 Samoa 諸島、西方約420キロにある Tonga 諸島、東方約950キロにある Cook 諸島で、この三つの群島に囲まれている。激しい風と波に洗われたこの隆起サンゴ礁の島の周囲は平均標高約28mの急崖を成し、切り立った断崖の荒々しい海岸線はこの島にまるで自然の要塞のような様相を与えている。

サンゴ礁であるから全島が石灰岩から成り立っているが、内陸部の古段丘面（標高約69m）の地表のサンゴ礁は著しく風化し、土壌は島の北東部より南西部に向って、明るい疎林、熱帯雨林、シダ灌木林をつくっている。また島の周囲の沿岸地帯はココナツ林があるほかは灌木帯となっている。

島の地表で石灰岩が露出している部分も多いうえ、土に覆われていてもその厚さは薄い。ポリネシアの他島と比較しても土壌は肥沃とは言えず、全土の30%から40%が農耕に不適であると言われている^①。このような土地で人々は焼畑耕作を行い、タロイモ、バナナ、ヤムイモ、キャッサバ、ココナツその他の農作物を植えている。

沿岸部はヨーロッパからの宣教師の来島後、著しい変容をこうむった地域である。18世紀半ばに初めてヨーロッパ人がこの島に接近してきた時、この地域には集落も耕地もなかったが、19世紀に Samoa 人の説教師の指導の下に内陸部に分散居住していた人々が沿岸部へ移動して集中居住させられた。現在、集落はすべて沿岸部に点在しているが、集落間をつなぐ島の幹線道路はその当時囚人労働——伝道団の作った法に違反した者を労働徴発——によってその原形が形づくられた。



① 熱帯雨林



② 石灰岩が露出している

2. 気候

湿度が高く暑い雨季（12月～3月、平均気温27°C）と雨量が少なくやゝ涼しい乾季（4月～11月、平均気温24.3°C）の二シーズンから成る。日中は暖かく晴天が続き、夜は涼しい乾季に対して、雨季は高温多湿のため大変に凌ぎ難い日が続く。そればかりではなく、雨季にはしばしば島はハリケーンや熱帯低気圧（サイクロン）に襲われ、農作物や家屋に甚大な被害をこうむる。また、時には旱魃にも見舞われ、ハリケーンやサイクロンとともに飢饉をもたらすこともある。ハリケーンや旱魃による飢饉はこの島の民話・伝承の多くに語り込まれており、飢饉を止められなかった王が殺される話も伝えられている。

19世紀にこの島に在住した宣教師たちの記録が伝えるハリケーンや飢饉の様相は生々しい。例えば、J.C. Vivian は1871—72年のレポートに「(ハリケーンの)強風はプランテーションを破壊して農作物に損害を与え、荒廃は全島に及んだ。山側からの大水でカヌーは流失し、家々は倒壊し、タロイモもヤマイモも水浸しになった」^⑧と書いている。F. Lawes は1869年と1870年のハリケーンの後、「ココナツもバナナもその他の作物も吹き飛ばされてしまい、島は厳しい飢饉に陥った。その翌年は日照り続きで人々の悲しさはさらに深刻化した」^⑨と述べている。彼はまた1870年代と1880年代の数年連続した飢饉の時に次のような記録を残した。「ハリケーンのあと飢餓に見舞われたにもかかわらず、人々は実に勇敢で、忍耐強く、陽気ささえ漲っている。ハリケーンの前も旱魃のために食糧は潤渴していたし、その後も何日も日照りが続いている。この様な厳しさは今まではなかったことだ。少くとも長期に渡って続いたことはない。ハリケーン後、人々は懸命に bush を耕し、タロイモやバナナやサトウキビを植えたが、全く育っていない。太陽はじりじりと照りつけ、全てのものを焼け焦がす。それでも人々は働くことを止めず、雨を待ち続ける。漸く大量の雨が降ってきた。雨はプランテーションの姿をたちまちのうちに変え、人々の精神を生き返らせた。」^⑩

1957年から1960年にかけても、厳しい旱魃のあと、島は二年間続けて破壊的なハリケーンに見舞われた。現在でもほぼ10年間隔で壊滅的な被害をもたらすハリケーンが来襲している。

3. 人口

ロンドン伝道協会による最初の人口調査(1857年)によるとニウエ島の人口は4276人だった^⑪。その後徐々に増加して1883年には5126人に達したが、19世紀後半以降、奴隷船の侵入^⑫、度重なる伝染病の流行、島外の植民地プランテーションへの出稼ぎ移住などにより人口はむしろ減じ、1928年にはそれまでの記録史上最低の3747人となった。その後さしたる変化はなく、1950年代になり若干増加傾向を示したが、1966年の5194人をピークに主としてニュージーランドへの移住のため下向の一途を辿った。1991年には全島人口2239人(男1134人、女1105人。内ニウエ人は男子980名、女子982名)まで下がったが、1989年以降は減少傾向はやや緩やかで、安定期に入っていると思われる。

人口の性比は小差で女子人口がわずかに多い。また年齢60才以上の者の人口総数に占める割合は約10%であり、その点過去における比率と比べて大きな変化はない。

過去の人口統計によれば、島の西部に人口が偏っている。その理由は、東部では中央から南部に向かって熱帯雨林が続くが、西岸部の大部分の地域は焼畑耕作をする bush が占めているなど生態学的条件の違いに加えて、西岸部には外部から比較的に接近しやすい湾が Alofi と Avatele にあるという地理的条件の下で、外来の宣教師や商人が西岸部から上陸し、教化や交易を開始したという歴史的条件の違いもある。

西岸部への人口分布の偏りは現在でも続いている。1991年センサスに表われた数字に基づけば、東岸部の村落人口29.7%に対して西岸部は66.7%であった。島の商業の中心地であり、政府の置かれている Alofi への人口の集中化(全人口の30.5%)を勘案すれば、現在の西岸部への人口の偏りは都市化との関連でとらえられよう。

III 生 業

ニウエの国家予算の二分の一はニュージーランドの援助金である。これまでニウエはココナツ、パッションフルーツ、ライム、ヴァニラ等の農業生産物の輸出を試みては諸外国や南太平洋の他の

島嶼国との競争に打勝てず、挫折を繰り返してきた。現在はわずかではあるが輸出しているのはタロイモのみである^①。一方、広大な南太平洋の漁場に囲まれ、漁業において有利性があるように見えるが、島の地理的特異性のため水辺へのアクセスが容易でなく、自給用あるいは島内消費用の漁獲にとどまっている。現在、観光を以て島の経済を振興させようという企図が多くの島民の賛同を得て、政府も観光立国へ向けて努力しつつある。しかし、島外からの飛行便に安定性がなく、観光客の誘致も容易ではない。

こうした状況の下で人々は主に農耕と漁撈によって生計を立てている。

1. 農 耕

灌漑耕作は知られておらず、伝統的に焼畑耕作を行ってきた。現在島で生産している農作物は、主食の中心であるタロイモの他、ヤマイモ、キャッサバ、バナナ、サトウキビ、ココナツ、アロールート、甘薯、パンノキ、パパイヤ等だが、そのうち最後の三品目はヨーロッパ人との接触後に島に導入されたものである。



③ 畑を焼く



④ 掘り棒で穴をあけ、タロイモの新茎を植える



⑤ タロイモ畑

焼畑耕作地は“bush”と言われる灌木帯や疎林帯にあり、耕地を切り拓くにはまず木々を切り倒さねばならない。それを乾くまで放置し、大きな幹は取り除いて枝葉を燃やす。ごく最近では、焼かずにブルドーザーによって大木以外の灌木や下草を根こそぎにして整地する方法が採用され、拡大してきた。切り拓かれた耕地には一定の間隔に掘り棒^②で穴をあけ、新茎を植えてゆく。タロイモなら9ヶ月で、ヤマイモなら6ヶ月で収穫となる。作物の植え付けや収穫は季節を選ばないが、一年ないし二年間使用した耕地は一旦放置し、再び使用可能となるまで9年ないし10年の経過を待たねばならない。

bush の開墾という大きな労力を要する労働は男子が行い、その他の植え付け、雑草取り、収穫は男女共通の——子どもも参加する——作業である。

食糧の供給に責任があるのは男子である。とりわけタロイモは日常食として、また儀礼や祭礼における消費用、供出用にも年間を通して大量に消費するので、常にいくつかのタロイモ畑を耕し、さまざまな成長段階のタロイモ畑を用意して収穫に備えておかなければならない。ニウエ人がニウエで生活するにはタロイモは不可欠の作物で、他に十分な俸給を得ている階層の人々——例えば首相、政府高官、医者等——すら bush へ行きタロイモを栽培するのである。

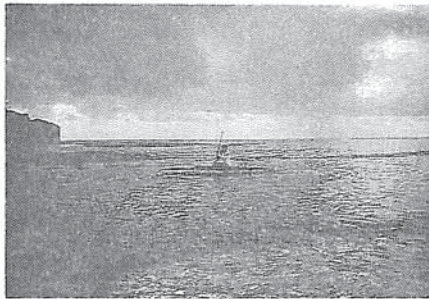
しかし、1989年の農業センサスによれば、全世界522戸のうち93%強の所帯が程度の差はあれ農業に従事しており、7%弱が全く農業生産に従事してい

ない。この非農世帯^⑥は首都 Alofi に多い。換金用作物生産戸数が17%にのぼることを考えると、農業生産物取得に貨幣経済が浸透してきていることがうかがわれる。

2. 漁 撈

漁撈は農耕とともにニューエではきわめて重要な生計手段である。漁場はかつては *magafaoa* (親族集団。後出) の所有であり、領域が定められていたが、現今ではそのような領域はなく、自由に漁をすることができる。

四方が海に囲まれているが、海岸線のほとんどが急崖なので海への接近は困難である。1989年センサスの、センサス施行前一ヶ月間に漁撈活動に従事した村落別世帯数には各村落の海への接近の難易度が反映され、たとえば、浜辺を持つ Avatele では86%、海へのアクセスの難しい Liku では22%などの差異が見られる。最近一、二年の間に、浜辺を持たない Avatele 以外の村落は急崖の上から海に、かなり急ではあるがコンクリートの階段を建設したため、海への接近はかなり容易になったが、それ以前は舟を担いで急崖を上り下りせねばならなかった。にもかかわらず漁撈はさかんで、1989年センサスでも平均61%の世帯が行っている。



⑥ カヌーによる釣り

彼らの伝統的な漁法によればアウトリガー付カヌーで沖合まで漕ぎ出し、さお釣、網漁、モリ漁を行う。現在でもこれらが行われており、男たちにとって手造りのカヌーは重要な財産だ。島全体を平均化してみると、約三分の一の世帯がこの型のカヌーを所有している(1989年センサスによると163世帯)が、その多くが海へのアクセスが比較的容易な村落に集中的に分布している。



⑦ 女子どもによるリーフでの釣り

最近では金属製のボート、ディンギーが使われるようになってきた。このボートを使えば沖合に出てから島に沿ってかなり移動することが出来るので、魚の種類も多く、漁獲も豊富である。このボートの所有率はセンサスによれば全世帯中一割程度で、これもやはり、海への接近が相対的に容易な Alofi や Avatele に集中している。



⑧ リーフでの貝類の採集

センサス施行前一ヶ月間に行った島民の全漁撈活動のうち、カヌーによるそれは38.2%、ディンギーによるものは16.5%であるのに比して、リーフでの釣りは38.7%であった。

ニューエ社会では伝統的に女はカヌーに乗ることはタブーであり、現在でも祭礼時の競艇以外では女がカヌーに乗ることはない。しかし女が漁撈を禁じられている訳ではなく、釣りの好きな女たちは干潮時にリーフで魚釣りをするのである。そこで採れる魚は小型のものだが、日和によっては大量に釣れる。

リーフで釣った魚は *umu* 料理に使うことはタブーであると言われているが、鍋やフライパンで調理して食することは一向に差支えない。リーフは魚釣りばかりでなく、女子どもによって貝類や甲殻類の採集が行われる場所でもある。

収穫物に関しては、かつては大きな獲物をとった時は近隣者や親族に分配するという慣習であったが、現在は換金用の漁撈も行われている。1989年センサスによれば、センサス施行前一ヶ月の間に漁撈を行った世帯は全戸522世帯のうち320世帯であり、そのうち、ホテル、レストラン、その他儀礼のために必要としている者に販売するなどして換金する回数が週一回以上の世帯9戸、〈週一回〉は6戸、〈少くとも月一回〉は23戸、〈月一回以下〉は14戸であった。残りは漁撈をしても換金せず、獲物は自家消費にあてるか、近隣・親戚に分配している。

3. 狩猟・動物飼育

島では豚、鶏、牛、犬、猫が飼育されており、これらの動物たちはロンドン伝道協会の宣教師たちの来島に伴って持ち込まれたと言われている。

宣教団の来島以前、島民の蛋白源となっていたのは魚類を除けば、ネズミ、大コウモリ、ハト、インコその他の鳥類、ヤシガニ、陸ガニなどであった。これらの動物たちの狩猟は現在でもきわめて活発に行われている。

鶏は放し飼いである。彼らは餌は与えられず自給自足の生活をしているので、自ら餌を求めて広範囲を歩き回らねばならない。自然繁殖し、老いて自然に死んでゆくから、その数は把握できない。以前はこうした鶏を食用にしていたが、今や、ニュージーランドより輸入する冷凍鶏肉が儀礼時にも家庭の日常食でも使われている。従って現在、放し飼いの鶏は誰かの所有権の下にある訳ではなく、単に景観のために放置しているにすぎない。

豚は儀礼の時の饗宴に不可欠なので各家庭で数頭飼っている。1989年農業センサスによると、豚を飼育している315世帯の内、67%強の世帯が1～4頭を飼育していた。往時は豚も放し飼いであったが、現在は衛生上、放し飼いはもちろんのこと、外を歩き回るのを放置しておくことも禁じられている。各家庭は豚柵を作って入れ、ココナツや生ゴミを餌として与えているが、豚たちは簡易柵を自由に出入りして外を歩き回っている。

牛は少数が飼育されているが採肉・採乳のためではなく、雑草を食むので bush の除草を目的として飼われている。島民はコンビーフ以外の牛肉をほとんど食べない。

犬猫はこの島では食用ではなく、愛玩用動物として飼われている。1989年農業センサスによると猫は330世帯（63.3%）で、犬は295世帯（56.6%）で飼っていると答えている。しかし全く野放し状態で、餌は与えられず、彼ら自ら餌を求めて歩き回らねばならない。

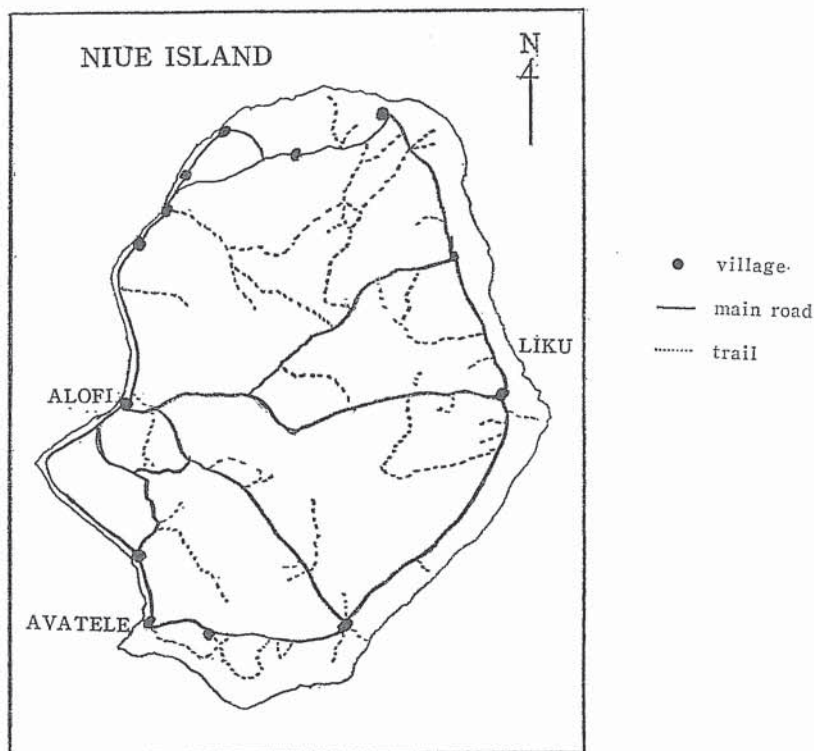
IV 村落組織

現在、島には外環道路に沿って13の村落が点在している。その内人口最大の Alofi は商業の中心地であり、諸官庁の所在地である。人々はそこを“town”と呼ぶ。13の村落は外環道路および島の中央を貫通して Alofi に向かう三本の幹線道路によって相互につながっている。

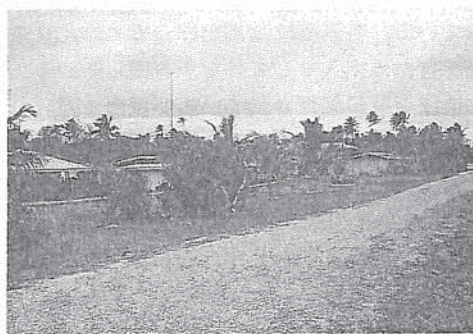
今日の村落は1850年代にロンドン伝道協会の宣教師が島に住みつき、布教を開始してから形成された。それ以前は人々は内陸部に分散居住していたが、布教上の便宜のために沿岸地域に移動、集住させられたのである。

伝承および考古学的発掘調査の結果から、ニウエにも往古には王政 (*patu-iki system*) が存在したと言われており、内陸部の大規模な遺構はその祭祀場であったと解釈されている^①。王の名前

地図 2



も伝承されているが、その実在した年代の推定には統一の見解がない。おそらく19世紀初頭までには *patu-iki system* は姿を消していたと考えられている^⑧。*patu-iki system* の崩壊とともに島内は戦乱時代に入り、人々は小集団に分かれて内陸部の bush や洞窟に住むようになった。彼らは比較的肥沃な内陸部で、焼畑耕作を行いながら畑地移動とともに居住地を移動させていった。従ってこの段階においては人々は集落を形成することなく、各家族・親族集団ごとに分散居住し、畑地のそばに簡易小屋を建てて住んでいた^⑨。



⑨ 村落のたたずまい

19世紀の半ばにロンドン伝道協会の宣教師が島に定住し、本格的な宣教活動が始まると、宣教師たちはたちまちのうちに沿岸地帯の数ヶ所に伝道所（教会）を造りあげてしまった。そしてここを中心にしてその地域の bush に分散居住していた人々を集めて居住させた。そこは教化の場所となっただけでなく、人々の新しいコミュニティの中心地ともなった。

だが当初は人々は週日は bush の小屋に住んで bush で働き、土曜日の夕方に9、10キロも離れた村へ食料を持ってやってきた。そして日曜日に教会へ行って宣教師の話を聞き、料理を食べて、日曜日の夜、bush へ帰るという生活が続いた。やがて自転車やバイクの導入とともに主住地が内陸部から教会のある沿岸部の集落に移り、遠隔地の bush には労働の為に通うようになったが、そ

の変化の時期および過程は個々の村落によっても、また各家族によっても多少のずれや差異がある。これが今日の沿岸部の集落の形成過程である。

現在の村落*maaga* (village)はかつての*maagamotu*(district)に基盤を置いている。*maagamotu*の起源はヨーロッパ人来島以前からの社会・政治的単位にあり、19世紀初期にはすでに各*maagamotu*の領域は明確になっていて、領土の防衛は人々にとり重要な課題であった。前述の戦乱状態の時代における戦いも親族組織の中のいずれかのレベルの単位集団間か、*maagamotu*間もしくは島の南半分(*Tafiti*)対北半分(*Motu*)の間で行われたが、なかでも*maagamotu*間の戦争が最も頻繁であった。この*maagamotu*に基づいて後に村落体制が築かれる。20世紀初頭、島は11の*maagamotu*から成り立っていたが、その後統廃合を重ね、今日のような13の*maaga*となった。

maaga 廻っては*maagamotu*の構成員は共通の祖先からの出自であることを意識しており、始祖に関する起源神話が伝えられている。しかしながら、具体的に系譜関係が迎えられるのは世代深度の浅い、比較的近年の祖先以降であって*maaga* (*maagamotu*)の構成員が全て明確な血縁関係によって結ばれている訳ではない。

maaga (*maagamotu*)はニウエ島というひとつの島嶼社会の中の自律的な政治的単位で、内婚的単位でもあった。現在80歳代のインフォーマントが「他の*maaga* (*maagamotu*)の領域へ行くことなどほとんどなかった」と言っているように、人々は自分の*maaga* (*maagamotu*)の中で出生し、成長し、交流し、結婚して死んでいった。現在でも*maaga*内の内婚率は高く、*maaga*間の競争意識が熾烈で、自己の*maaga*へのアイデンティティは極めて強い。

*maaga*全体の意志決定はそれを構成する世帯の代表である*patu*の集まり、すなわち*fono* (village council)における全員の話し合いによって行われる。*patu*は概ね既婚者で独立世帯を構えている男子であるが、場合によっては未婚の成人男子も、また成人女子もなることがある。

maaga (*maagamotu*)はかつてはいくつかの小家族から成る集団(*fagai*)から構成されていた。*fagai*は宣教師の伝道が始まり、内陸部での分散居住から沿岸地域における集落形成という過程で形成された集団である。前述のように、人々は集落を主住地とする以前は*bush*に恒常的に居住し、週末にのみ集落にやって来て礼拝に行った。*bush*で近隣に住んでいたり同じ土地(*fouua*)を使っていた者同志が——同じ親族集団に帰属する人が多いが単なる親しい知人である者も含めて——村では一軒の家に住み、共同で食事を作って食べ、教会や牧師への食糧や薪その他生活必需品の提供を共同で行った。この共同奉仕をする共食集団を*fagai*と言う。その集団の大きさは4家族から10家族ぐらいの間だったと言われる。

この慣行は当時、ロンドン伝道協会の宣教師として来島していたSamoa人の説教師たちが彼ら自身の生活を保障するために導入したもので、Samoaの伝統的な*faafangai*という慣習を起源とする。Samoaでは*matai*に献納するものであったが、ニウエでは宣教師への献納となった。

同一の*fagai*に属する者は、週日は*bush*で顔を合わせ、週末は集落で食事と労働を共にする緊密な集団を成していたが、異なる*fagai*の者とは集落で週末にのみ会う間柄であった。宣教師への献納物に関する*fagai*間の競争はすさまじかったと言う。

現在は*fagai*制度に代って*veveheaga* (quarter)制度が採用されている。村落を三つないし四つのブロックに分割し、一年間を四ないし三期に分けて各ブロックで分担して食料品、生活用品、現金等を出し合って牧師一家の生活を支えている。当番になった月には毎週一家族につき100から300ニュージーランド・ドルの負担になるという。

島内13ヶ村の全てにあるロンドン伝道協会の教会は各集落の中心部にあるvillage greenと呼ばれる広場の一角に牧師館や鐘楼とともに建てられている。広場は子どもたちの遊び場であり、ク

リケットやバレーボール、フットボール等を興じる場であり、また村人のほとんどが参加する village fair や富くじの会場ともなる。いわば公の儀礼、行事、行動が行われる場である。

こうした空間的配置が象徴しているように教会は村人たちの社会生活および精神生活の要となっている。礼拝は日曜の午前と午後、それに水曜の夕方に行われ、年輩者の中にはこの三回の礼拝に出席する者もいるが、そうでない者も少くとも日曜の礼拝のどちらかには正装して出席する。

礼拝には村中に響き渡る、執事の打つ鐘の音が導いてくれる。例えば日曜日の Avatele 村では午前中の礼拝のためには、

9:00 第1鈴（寝ている人は起きてそろそろ準備にとりかかりましょう）

9:30 第2鈴（服を着替えましょう）

10:00 第3鈴（礼拝を開始します）

このように鐘が鳴る。鐘の音に合わせて準備を行い、教会へ出掛ければ良い。日曜日は安息日なので働くことは許されず、bush や漁に行く者はいない。もし働いているところが見つかる人々から非難の目で見られる。

首都 Alofi にはロンドン伝道協会系の Ekalesia Niue Church の他、カソリック教会、モルモン教の Lutter-day Saint Church や Seventh-day Adventists Church などがあり、他の村々からこうした教会へ出掛けていく人もいる。またロンドン伝道協会系以外の教会がある村落もある。すなわちどの村落でも全ての村人たちがロンドン伝道協会系列の教会に所属している訳ではない。

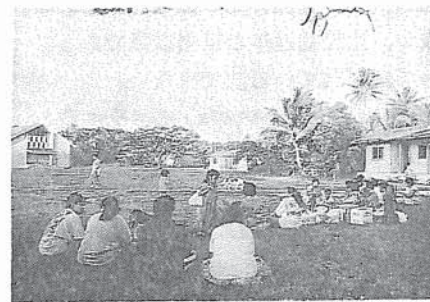
しかしながら *fagai* 制度を継承した *veveheaga* 制度はロンドン伝道協会系以外の教会に所属している者たちも含め、村人全体によって実行されている。

現在、村人たちの結婚式、葬式、Hair-cutting ceremony, Ear-piercing ceremony などの通過儀礼を初めとして年中行事や各種の公的な儀式（建国記念の祝賀会、village fair 等）において最も重要な役割を担うのは各村落の教会——すなわちロンドン伝道協会系の教会——の牧師群である。教会の影響力は以前に比べて弱退化してきたとは言え、

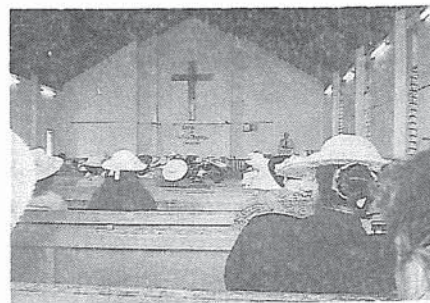
村落コミュニティは依然としてロンドン伝道協会系の教会の牧師を戴き、長老および執事たちを中



⑩ 村の広場で遊ぶ子どもたち



⑪ 村の広場で富くじをする人々



⑫ 日曜の礼拝



⑬ 礼拝が終って帰る人々

心とした村人たちの教会活動によって維持されていると言っても過言ではない。

牧師、長老、執事といったいわば聖なる分野のリーダーたちと、村落から選出される国会議員一名ないし数名（各村に一名の枠。その他に全国区が全島で六の議席がある）の「俗」の分野のリーダーたちの間に緊張状態が生ずることはない。何故なら、積極的な教会活動が評価されて国会議員として選出されるのであるから、「俗」の分野のリーダーは「聖」の分野のリーダーでもあるのだ。

V 社会組織と土地制度

ニウエの社会経済的単位は基本的には夫婦と未婚の子どもから成る小家族である。

前章で述べたように、人々は他の *maaga (maagamotu)* へ足を踏み入れること自体あまりなく、ひとつの *maaga (maagamotu)* で生まれ、育ち、生活し、死んでいった。いわばそれは彼らの小宇宙であり、結婚も *maaga (maagamotu)* 内婚が極めて当たり前であった。現在に至ってもなお村内婚率は高い。

婚後居住制は双処居住制で、状況に応じて夫方、妻方のいずれかの土地を選んで居住することができる。村内婚であっても夫方集団の土地と妻方集団の土地は截然としており、いずれかを選んで新世帯を持つ。

人は結婚して親から独立した世帯を築いて初めて一人前の *patu* と見なされるので、結婚後はできるだけ早く親の家から出て別の世帯を持つとする。結婚後しばらく親の世帯に留まっているのは、独立居住する条件が整わず、一時的に寄寓しているにすぎない。また、高齢者でも——たとえ配偶者を失った場合でも——子どもと同居はせずに別世帯を続けるのが一般的である。ただし若い女の多くは正式な結婚の前に一人ないし二人の子どもをもうけるが、この場合は実家に住み続ける。また時にはオイ、メイ、イトコなどが臨時のメンバーとして宿泊していることもある。だが、一世帯の恒常的メンバーは一組の夫婦と未婚の子どもという構成が原則であり、それ以外の者が同居しているのは何らかの事情があるためか、もしくは過渡的、臨時的措置としてであると言っても良い。社会経済的に基本的な単位である世帯がこのように小家族の構成をとっているのだが、ニウエ語には「小家族」に相当する語はない。

現在島民たちが“family”という英語を以て当てているニウエ語は *magafaoa* である。これは1972年にニウエ人たちの編集でニウエ教育省から出版された *Niue Resource Book* によると、“family unit”もしくは“extended family”と規定されている。

彼らは日常生活においてこの語を ① immediate family ② extended family ③ kindred を指示するために使うほか、④ ‘親族関係のある’ (related) という意味でも用いる。すなわち *magafaoa* は、重層的な出自集団の各層を指すと共に広く親族関係のある人々のカテゴリーをも指す。同時に、「血縁関係がある」ことを表示する言葉でもあり、集団のみならず関係をも表わしていると言える。

集団としての *magafaoa* は cognatic descent group (双系的出自集団) で、始祖（男性もしくは女性）と血縁関係を有するすべての者が成員権を持つ。養子も含まれる。それは小さな共住的な集団である場合もあり、また居住地とは無関係に共通の始祖との血縁関係を通して成り立つ集団である場合もある。

個人から見れば、父母を通して、また四人の祖父母を通して、さらにその上の世代の八人の祖先を通して、理論的には数個の *magafaoa* の成員権を持つ。が、その中で彼（彼女）が最も強い発

言力を持っているのは彼（彼女）が居住し、使用している土地の *magafaoa* においてである。

集団としての *magafaoa* は経済的に非常に重要な意味を持っている。全ての土地は *magafaoa* が所有しており、個人はその一部を使用しているにすぎない。土地所有単位である *magafaoa* は、一般に三から四世代遡った共通のひとりの男性あるいは女性の祖先から由来した男性と女性から構成され、これには養子も含まれる。

島の全ての土地は *fonua* という境界線の明確な区画に分かれている。各 *magafaoa* はいくつかの *fonua* を所有し、当該 *magafaoa* の成員である既婚もしくは未婚であっても世帯を持つ成人男女に *fonua* の一部の使用権を分与し、彼（彼女）の家族が使用する。その区画の使用権は彼（彼女）の子孫に継承されてゆく。娘も両親が権利を有する *magafaoa* の土地に関して full rights を持ち、結婚後、夫と共にその土地に居住し、また一区画を占有することができる。

(両) 親の死後、(両) 親が権利を有する土地の使用権はこの様に息子たちや娘たちに継承されるが、子どもたちが全員平等に継承できるかと言えば、必ずしもそうではない。通常、土地区画は分割されず、(両) 親がどの区画をどの子供に譲るかを決定する。(両) 親の生前に語った申し送りを子は守らねばならない。もし(両) 親の意志に副わないと、死者の霊である ghost (*aitu*) の怒りを招き、不吉なことに見舞われると信じられている。

(両) 親が子どもたちに土地の使用権を割当てる時に最も重視される基準は彼らの親に対する態度や行動である。特に親の老齢時における扶養や介護は親の土地権継承のための重要な理由となるとされている。他の子どもたちは親を省みずひとりの子どもが専ら面倒を看たため、親の土地権をほぼ独占したケースもある。

親の土地権を継承することができるのは実子ばかりではない。養子も *magafaoa* が承認すれば実子と対等に継承できる。その場合、養子と継承する土地の original ancestor との間に血縁関係のあることが肝要である。従って、妻方ないし夫方の親族から養取するのが一般的で、養子が妻方の親族なら妻（すなわち養子にとっては養母）の土地権を、夫方の親族なら夫（すなわち養子にとり養父）の土地権を養子は継承することができる。さらにもうひとつの条件は養子の養親に対する態度や行動で、養親の扶養や介護を行わなかったり、見捨てたりすると、養子は養親の土地権継承を *magafaoa* によって拒否される。

なお、養子が継承する土地権は、養親あるいは実親のどちらかからもしくは両方からで、それは各々の *magafaoa* の適切な土地の有無や養子と養親や実親との関係などの状況によって決まるものである。

magafaoa の土地の一区画を使用する権利を成員は持ち、それはその子孫にまで継承されてゆくとあたかも個人所有地の趣を呈するが、あくまでも土地は *magafaoa* の所有下にあり、次の二つの条件のいずれを欠いてもその土地への権利は *magafaoa* に帰却せねばならない。

まず第一に、土地に権利を持つのは、当該 *magafaoa* の original ancestor と何らかの血縁関係を有する者であるということ。後継者がいない場合は当該区画に対する使用権を失い、*magafaoa* に没収される。従って後継者となる実子を持たない者は養子をとるが、養子は *magafaoa* 内から選ぶことになる。

婚入してきた妻を残して夫が死亡した場合、妻は夫の *magafaoa* の土地に留まる権利を持たない。その夫の血を引く子どもがいれば子どもの名において妻はその *magafaoa* の土地を使うことはできるが、夫婦に子どもがない場合、妻は原則として去らねばならない。しかし夫の *magafaoa* の血縁者を養子にしていれば、その養子の名において妻はその土地に留まることことができる。妻方居住をした夫婦の場合はこのケースと夫と妻が入れ替わるだけで同じことが生ずる。

妻方居住をした夫婦が妻方の *magafaoa* の土地に家を建てるのが許されたでしょう。その家屋は当該夫婦の個人所有物と見なされ、彼らの子孫に継承されてゆく。しかし子孫が絶えると家屋は *magafaoa* のものとなる^①。家屋が建つ土地は妻方 *magafaoa* のものであるから、妻の死後、夫は子どもがいれば子どもの権利の下にその土地に住むことができるが、子どもがいない場合はその土地に住み続けることはできない。

現実にはいずれの場合も *magafaoa* の決定次第であって、残った妻ないし夫が土地から追い出されることもあれば終生そこに住むことが許される場合もある。ただし彼女（彼）が亡くなった夫（妻）の *magafaoa* 外の者と再婚した場合にはその土地に住み続けることは断じて許されず、追い出される。

第二に、割り当てられた土地を実際に利用するかそこに居住する必要がある。一定期間土地Aを放棄して使わなかったり、その土地を離れて他の *magafaoa* の土地Bに居住すれば、土地Aへの権利は次第に弱まる。子どもは土地Bで生育するので当然土地Aとのつながりは薄くなり、その子どもを起点とする子孫たちは土地Aへの権利を失ってしまう。権利を回復するには *magafaoa* の承認が必要である。土地の放棄から使用権の喪失までの期間は当該 *magafaoa* の所有している土地の規模により、所有地積が小さいほどより短期間に土地への権利を失う傾向がある。

使用権が廃棄された土地は *magafaoa* のものとなる。*magafaoa* はしばしば個人々人への割当地以外に未割当地をプールしておいて、成員の農耕、採集、薪採りなどのために共用する土地として^②、また、成員の誰かが世帯を持ち、新しい割当地を要求してきた時のために利用することができる。

magafaoa の代表者はかつては *pule magafaoa* と呼ばれ、世襲ではなく、通常は *magafaoa* の構成員のうち最年長で、当該 *magafaoa* の土地に居住している男子が就いた。しかし適任者がいない場合はより若い男子もしくは女子すらも *pule* になることがあった。また一旦選ばれても他の成員たちが不満であれば罷免されることもあった。*pule* という語は権威ある、統制力を持った地位を意味する。彼は *magafaoa* の対外的な代表者で、成員の結婚や養取行為に関して強い発言力を持っていたが、基本的には *magafaoa* の成員全体によって意志決定がなされた。

現在、*pule magafaoa* に代って *leveki magafaoa* という名称が使われている。*leveki magafaoa* には *magafaoa* の最年長者——男であれ女であれ——が就くのが順当とされているが、国会議員、官吏、医師、牧師、長老等島全体社会において社会的地位の高い者がしばしば *leveki magafaoa* に選ばれている。“*leveki*”は‘世話（をする）’‘面倒（を見る）’を意味し、*pule* の持っていた権威や統制力を抜きとり、名実ともに *magafaoa* の世話役的存在となった。尤も *pule* も権威や統制力を実際にどう運用するかは *pule* の個人的資質の問題であったし、専横性は最も慎まねばならないと考えられていたので、*pule* と *leveki* の間に本質的な違いはないと考えられる。

leveki magafaoa の職分を次に挙げる^③。

1. 成員の土地の割り当てをする。
2. 部外者から *magafaoa* の土地利用や賃貸借が懇請された場合にその諾否を皆に謀って決め、回答する。
3. *magafaoa* 成員の養取行為に際してその諾否を与える。養子にも実子と変わらず土地権継承が認められるので、養入子が将来、*magafaoa* の土地を継承する可能性があり、その為に養入子の親族関係を判断し、諾否を与えるのである。
4. *magafaoa* の規模が大きくなり、世代深度が増すと、*magafaoa* を分裂させて新しい分枝 *magafaoa* を創出するが、土地も同時に分割する。その際に采配を振る。

こうした *magafaoa* 全体に関する事の決定には *leveki* が最終的な決定権を持ってはいるが、*magafaoa* 成員全体の承諾が必要である。全体会議を開いたり、成員個人との話し合いを積み重ねたりして *magafaoa* 全体の意志をまとめるのが *leveki* の役割である。成員の意見を無視したり、専横さが目に余れば *leveki* は任を解かれ、他の者が選ばれる。

V まとめ——むすびにかえて

付近に小島すらない、地理的に隔絶された南太平洋の孤島であるニウエ島は現代に至ってもなお島外との交通は困難である。週一回の定期航空便は航空会社の都合で休便・廃便になることもしばしばあり、計画性ある移動が保障されにくい。多くの島々を経巡って月一回寄港する貨物船は目的地との間の物資の輸送に時間がかかり過ぎる。

土壌は石灰岩の上に薄い層を成しているに過ぎず、肥沃さとはかけ離れ、農耕に適していないが島の人々は焼畑耕作を生業としている。四周が海に囲まれているにもかかわらず海へのアクセスが困難なために漁業は振わない。農業、漁業ともに換金用生産を行っている世帯はわずか十数パーセントで、ほとんどが自家消費用生産をしているに過ぎない。わずかなタロイモを除いて輸出物資はなく、逆に、日用品をはじめとして生活のあらゆる分野の物資を——野菜、生鮮食料品に至るまで——ニュージーランドから輸入している。

赤道と南回帰線の間位置しており、年間を猛暑と温暖さが交互にやってくる気候だが、ハリケーンやサイクロンの被害が定期的に繰り返され、かつ旱魃にも襲われる。

以上のような地理的、生態学的条件の下にあるニウエにも太平洋の小島嶼国に全般的に見られる周辺先進国への大量移住現象が起こり、1960年代には5,000人規模であった島の人口が1990年代にはその約半数に減じた。

この島には少なくとも1000年以上前から人々が住み始めたことがわかっている。かくも小規模な社会であるにもかかわらず、現存の島民が形質的、言語学的に地域差をかなり顕著に示すことから、いくつかの島から人々が来住したと考えられている。現在のところ、Samoa 諸島、Tonga 諸島、Cook 諸島の他、メラネシアからも人々が漂着したと推察されている。

年代は不詳であるがニウエにも王権によって統一されていたと考えられる時代があった。しかしそれは19世紀初頭には崩壊していたらしい。19世紀の半ばにヨーロッパ人宣教師が初めてニウエ島の土を踏んだ時に見たのは、小集団が各地に分かれて争い合う社会であった。

ヨーロッパ人との接触以前からニウエにおける社会集団組織化の原理は血縁である。その社会集団 *magafaoa* は双系的の出自集団で、島で唯一無比とも言える生産手段たる土地の所有団体であり、人はみな *magafaoa* を介してのみ土地への権利を獲得できるという意味で最重要な経済的単位である。これは世代の進行とともに枝分かれし、同時に土地も分割されてゆくが、柔軟な構造の中で状況に応じた対応が個人および集団レベルで行われているうちに結果として集団も土地も分割されているのであって、明確な原則によって順次機械的に分割されてゆく性質のものではない。従って分割の過程では多くの諍いや衝突、争いが生ずる。土地所有単位としての *magafaoa* は重要な経済的単位として求心性・統合性が機能すると同時にそれは常に分裂への動因をはらんでいるのである。

複数の *magafaoa* が集住して *maaga* を形成する過程では血縁原理のみならず、*fagai* さらには *veveheaga* という地縁組織を導入し、それらを基盤にしてコミュニティづくりが行われた。その活動の担い手である宣教師たちは宣教という目的のために島民達を集住させ、キリスト教の倫理道德律に基づいた教化に努めた。成立過程におけるそのような背景を持つ村落のコミュニティ活動

は依然として牧師と長老と数人の執事を中心として行われている。そして村の各世帯から代表が集まって構成される村落会議 *fono* は教会と不即不離の関係にある。

教会組織と村落会議が対内的組織であるのに対して、いわば対外的代表の役割を果たすのが村落選出の国会議員である。国会議員、教会の長老や執事、牧師、村落会議の三役のほとんどが各自の *magafaoa* の *leveki magafaoa* を兼ねており、*leveki* 層が村落をまとめ、導いていると言って良い。以上が現代ニウエ村落の鳥瞰図である。

註および文献

I

- ① Trotter, M. M. *Niue Island Archaeological Survey*. 1979 P.48
- ② 1993年8月および1994年9月より1995年1月までと1995年5月から同年8月までの約7ヶ月半、現地調査を行った。1994年および1995年の調査は大妻女子大学海外研修制度の下で実現できた。ここに記して謝意を表します。

II

- ① *Niue Agricultural Census*. 1989, p.1
- ② Vivian, J. C. London Missionary Society. Microfilm 337.
- ③ Lawes, F. London Missionary Society. Microfilm 374.
- ④ Lawes, F. London Missionary Society. Microfilm 341.
- ⑤ Harbutt, W. & G. Drummond London Missionary Society. Microfilm 336.
- ⑥ 1862～63, ペルーの海賊が150人以上のニウエの若者を捕え、南米の奴隷市場に売り飛ばした。

III

- ① 1989年農業センサスではタロイモの輸出量は45,860kgであった。そのうち17,880kgが商業ベースに乗り、残りは親戚や友人への贈答用であった。
- ② 掘り棒には *koho akau* (a wooden digging stick) と *koho lapatoa* (a steel digging stick) の二種類があり、現在どちらも使われている。
- ③ この中に多数の外国人が含まれる。

IV

- ① Trotter op. cit., p.58
- ② Ryan, T. F. *Prehistoric Niue*, Unpublished thesis. 1977, pp.148—149
- ③ Nisbet, H. London Missionary Society. Microfilm 336.

V

- ① McEwen, J. M. *Report on Land Tenure in Niue*. 1968, p.9
- ② McEwen op. cit., P.10
- ③ *Ibid.*, p.9 も参考にした。